

動物取扱責任者講習

爬虫類編

もくじ

衛生管理

- 細菌
- 寄生虫
- 真菌
- ウイルス
- ヒトへの影響

日常管理

- 病気の兆候
- 体調不良時の対処法
- サプリメント

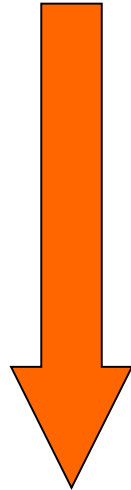
細菌①

- 環境中には多くの細菌が存在(存在しない所はない)
ただし、病原性のあるものはごく一部
- 細菌感染による病気は様々
→多いのは呼吸器症状(風邪のようなもの。ただし、重篤化すると肺炎に)や皮膚炎など
- 爬虫類の病気のうち、細菌が関わるものが最も多いと言っても過言ではない

細菌②

○細菌の増殖に必要なもの

- ・温度（一般的に高いほど増殖）
- ・水分



爬虫類の飼育環境

- ・だいたい加温している
- ・湿度もある程度をキープ
- ・水生の種では常に水がある

爬虫類の飼育環境の多くは、細菌増殖に適した条件

細菌感染対策

○飼育水

- 排泄物で汚染される
- ろ過循環では細菌を取り除けない
- ついでに、アンモニア濃度等にも注意

○床材

- 水ゴケや腐葉土→適度な水分→細菌には快適
- 乾いた土→糞や尿、水入れがあれば細菌は生存



- できるだけ簡便な環境で
- こまめに水換えや床材交換
- 糞や残餌はできるだけ早く取り除く

寄生虫①

○回虫や蟯虫などの内部寄生虫、ダニなどの外部寄生虫

○環境中で繁殖できるもの、卵などの状態で長く環境中に存在できるものも

→一度汚染されてしまうと浄化するのが厄介

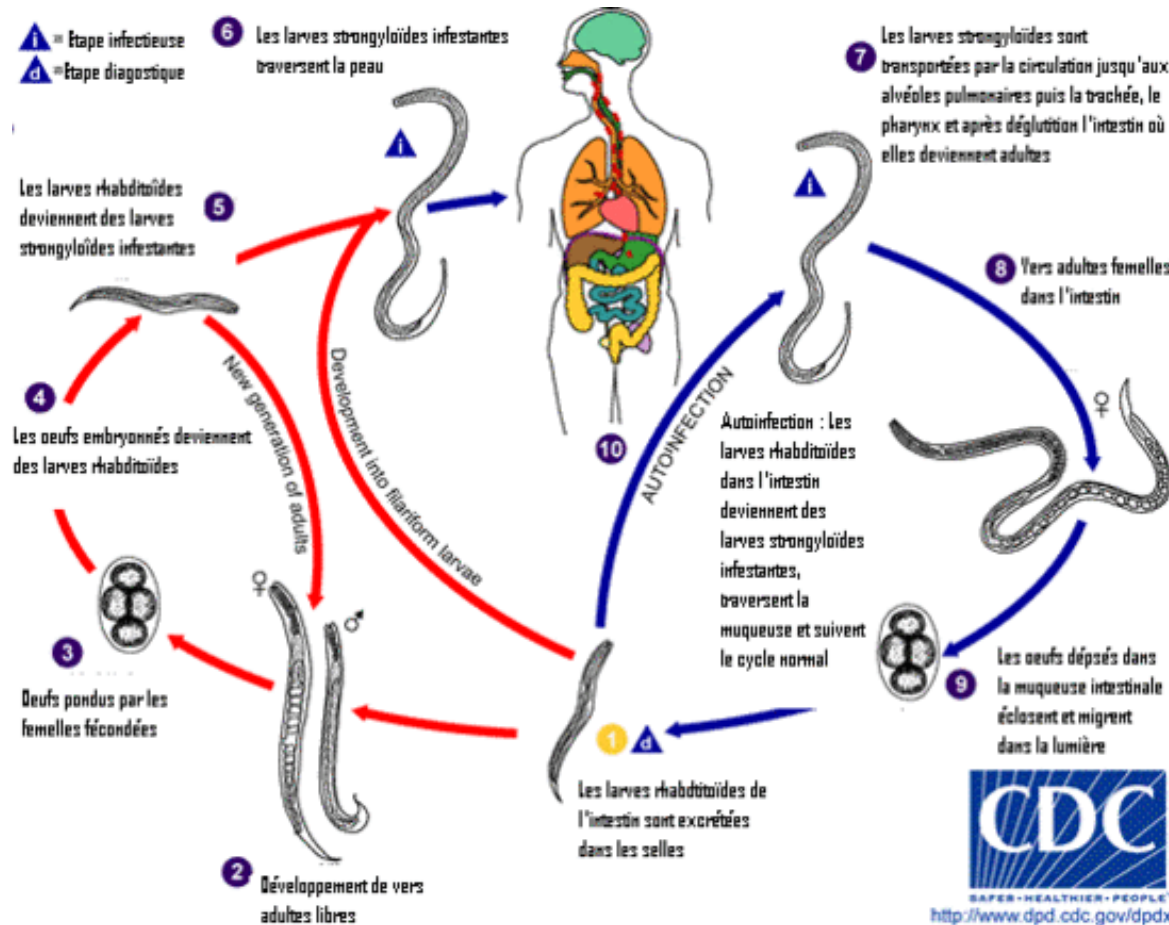
○個体が弱った時などに病害が出やすい



寄生虫対策①

○床材

- ・水ゴケや土→完全に取り換える(できればケースごと)
表面だけ、一部だけの取換えでは浄化できていない



寄生虫対策②

ちなみに・・・

ダニについては、床材もケースも交換しても、個体が弱るとどこからともなく寄生しにくる

○その他の対策

・新規個体導入時、できるだけ糞便検査にて寄生虫の有無を確認 →顕微鏡があれば自身でも可能



ウイルス、真菌

○ウイルス

- ・検査も治療もほぼ不可能

→感染拡大させないために、手や器具等はしっかり洗うもしくは交換することが重要

○真菌

- ・細菌と同様、環境中に普通に存在。呼吸器症状や皮膚炎（水カビ）の原因となりうる

- ・環境中でも普通に生存可能→浄化はほぼ不可能

- ・予防のため、手や器具の洗浄、ケージ内の衛生状態維持が重要

感染症対策①

- ・日々の掃除に加え、こまめな水換え、床材交換
→できるだけ簡便な環境を
- ・個体ごと(もしくは群ごと)に手洗い、器具交換
→特に新規搬入個体を扱う際には
- ・新規搬入個体は既存個体と一緒にしない。また、世話は一番最後に
- ・複数頭飼育ケース内でどれか1個体でも感染症が発生した場合、全体が感染しているものとする

感染症対策②

- ・感染＝発症ではない。感染していても症状がないことも多々。ストレス等で免疫力が下がった時に発症する
- ・環境中に存在し、普段は病気に関わらない菌などが、個体の免疫低下に伴って悪さすることも(日和見感染)
- ・ケージ、器具等は、十分に乾燥させればほぼ問題ないが、消毒を使用する場合はアルコール等を用いる
- ・消毒液に浸け込む場合、長くとも数日で効力はなくなるため、液自体のこまめな交換が必要。効力の弱まった液は、ただの病原体培養場所になってしまう

検疫のすすめ

○検疫とは

新規搬入個体(もしくは群)を一定期間隔離飼育
→病原体の有無をチェックし、既存個体への蔓延を防ぐ

○検疫中は

- ・輸送や環境が変わることによるストレスで、今まで出ていなかった症状が出る(病原体を保有していたが発症していなかった場合、日和見感染等)
- ・エサを食べなくなる等の体調変化も多くみられる
- ・検疫個体の世話は、既存個体の後で



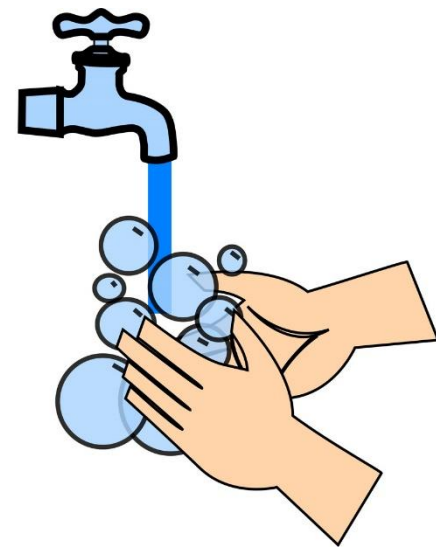
- ・体調の変化、摂餌状況は必ず確認
- ・可能であれば糞便寄生虫検査

ヒトへの影響

- 爬虫類のウイルス、寄生虫はほぼヒトへの感染はない
- 細菌の多くと一部真菌は、ヒトへも感染し病害を示す
 - ・細菌は主に食中毒の原因
 - ・有名なところと言うと、サルモネラ感染症
 - 爬虫類の多くは保有。爬虫類自身に症状は出ない
 - 詳しくは次のスライドへ



ほとんどは手洗いを確実に行えば防げる



サルモネラについて

Salmonella enterica

2000種類を超える血清型に分けられる
病原性があるのは一部と言われている

爬虫類や家畜など、動物は多くが保菌

ヒトへの感染例の多くはカメから

爬虫類の保菌率は50%～90% (厚労省)

カメでは数%～80% (SCAPARAテキスト)

ヒトでは

- ・菌の付着した手や食品から感染
- ・胃腸炎症状の食中毒を引き起こす
- ・重篤になると死亡する例も(幼児、高齢者など)
- ・日本国内でも発生(例数は少ない)

日常管理

- 健康管理と病気の兆候
- 体調不良時の対処法
- エサとサプリメント

健康管理と病気の兆候①

- 体調不良時、だいたい食欲不振と活動量低下が見られる
→環境温度が低い場合も同様の状態になるので注意
- もともと代謝も低く、毎日エサを食べるわけでもない
→明らかな症状が出た時は、だいたい末期状態
- 治療への反応も鈍い
→症状が出た時には病気が進行していることが多い上に、代謝が低い分、薬の効果が現れにくい

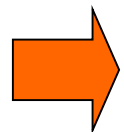


普段からしっかりと観察することが重要

健康管理と病気の兆候②

○日常的な健康チェックの項目

- 摂餌状況 → 食欲不振になっていないか
- 活動量 → 不活発になっていないか
- 呼吸 → 努力性の呼吸ではないか、回数は？
- 外観 → 皮膚の状態、鼻水等の異常がないか
- 排便排尿 → 色、形、硬さ、量など普段と変わりないか
- 口の中 → エサを食べにくい原因があるかも??
- 泳ぎ方 → 水生ガメの場合、傾いて泳いでる時は肺炎のサインかも
- 脱皮の状態 → 脱皮不全、周期が長い等は体調不良のサインかも



普段と異なるところはない？

体調不良時の対処法①

- まずは食欲不振や活動量低下の原因が環境でないことを確認 → 温度と湿度をチェック
- 代謝を上げるために、とりあえず温浴
 - 35～40°C弱(種差あり)の湯に20分程度浸け込む
 - 体温を上げ代謝をあげる
 - 脱水に陥った場合も、ここで飲水が期待できる
 - 何もなくても、日常的に実施するのもオススメ
- 明らかな症状、上記を試しても変化ない場合 → 獣医師に診せる

体調不良時の対処法②

○獣医師から薬を処方されたら

- 指示通りに投薬
- 自己判断で投薬の中止、量の変更等
→かえって悪化する可能性も

○皮膚の症状くらいなら(水カビ、外傷等)

- イソジンを適度に希釈した液に浸け込む
→温浴ついでに実施しても可(飲水させない工夫は必要)
- 塩化ベンザルコニウム等も比較的安全に使用できる
- ただし、これらの液も比較的すぐに効力を失うため、使い回しは厳禁。その都度作製し、終わったら廃棄

エサとサプリメント①

○エサはそれぞれの種に合わせて

- リクガメフードやトカゲフードなど、専用の配合飼料がある場合は、それが最もバランスがいい(完全食ではないが)
- 単体のエサをやり続けるのは注意が必要
 - コオロギ:カルシウムが不足しがち
 - ミルワーム:栄養バランスが悪い
 - ほうれん草:シュウ酸が多く、結石の原因にも
- 成長ステージによっても、必要な栄養素は異なる

などなど



種類、成長ステージ、含有栄養素など、様々な情報を基にエサ内容を調整

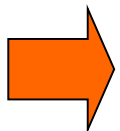
エサとサプリメント②

○不足する栄養素はサプリメントで補う

- ・不足しがちな栄養素はカルシウムやビタミン
- ・コオロギ、野菜、野草には必ずカルシウムを

○ビタミンの添加には注意

- ・脂溶性ビタミン(AやD)は過剰症が起こりうる
 - 植物食のカメやトカゲでは、エサにカロテン等が含まれた野菜を加えることで、ビタミンA添加はほぼ必要なし
 - ビタミンDは、日光浴、紫外線照射で補える
ただし、市販のUVランプは非常に近い位置でないと紫外線効果が見込めない



エサ内容と、それに見合ったサプリメントを！！

最後に

繰り返しになりますが・・・

- 器具や手を洗う！
- よく観察する！
- エサには栄養学的根拠を！